

加藤辨三郎 述

歎異抄

2

文責 本誌編集部



遺伝情報

親鸞聖人が眞実報土と仰せになるところは、本願が成就した世界です。つまり、極樂世界であります。それは精神のなかに莊嚴された世界、信心の世界であります。善導大師は、極樂世界というは無上涅槃界であるといっているだけです。ですから極樂世界というのは涅槃の世界、涅槃の世界というのは悟りの世界、悟りの世界というのは、森羅万象ことごとく、一緒に悟りが開けるような境地とおもうの

です。眞実報土とは、このような世界だと私は信じさせていたでているのです。

親鸞聖人のご著書を拝見しますと、たとえば本願力をお説きになるとき、他力というのは本願力なりと、他力という言葉をお使いになられます。それを裏からいえば、本願力が他力であるといえるのです。他力とは、非常に深い教えです。しかし、今日の人たちは、本願力って何んだ、他力って何んだ、といえます。そして誤解のまま他力本願などと、平気で使っているのです。実際私たちが、宗教的にこの世

のなかのものや事を考えさせていざと、他力ならざるものはありません。私たちは、自分が生きているといっています、生かされているのです。生かされていることは、生きていることです。

このあいだある大学で「生命科学と佛教」という題で講演を頼まれたので、ちょっと予習をしていました。そのとき私は、なるほど佛教は、二千年も前に、こんな言葉で物質を見ていたのかと感嘆しました。それは地・水・火・風の四大です。われわれの体は、この大地と水と火と空気、つまり地・水・火・風の四つの元素からできあがっているのです。しかもわれわれの体は、単に物質の集積でなく、身心一如、体と心は切り離すことができません。この心を持っていてるものを有識といえます。大地であろうが、水であろうが、火であろうが、風であろうが、心を持っている。ただ転がっている物質ではなく、識が有るといわれるのです。恐らく今日の科学者たちでも、物質が心を持っていることを信じる方は、すくないのではありませんか。皆さま方も、物質は、単にものであって、心はなく、踏んでも、蹴ってもいいようにおもっていられるのではありませんか。

そこで生命を考えて見ましょう。われわれは受胎によつ

て生まれています。お父さんの精子とお母さんの卵子とが、一対一で出会ったのが、融け合って一体になり、一つの細胞になります。細胞は、千倍以上の顕微鏡でやっと見るこができるような小さなものです。その小さなもの二個が合して一個になる。これだけでも、今日の科学では解明し切れないほど魔訶不思議なのです。しかも精子も卵子も遺伝子があり、今日はこの遺伝子の構造がわかっています。それは大体五種類、あるいは生物によって多少の違いがあるが、多い数ではないのです。その遺伝子を形づくるところの物質は、四大、つまり大地も、水も、火も、空気も、それぞれが持っています。無から有が生まれているのではなく、現に与えられたその四大、四つの元素のなかのものを選択して、遺伝子をつくっているのです。そこで結合すると、お母さんの胎内で遺伝子の組み替えが自然に起こる。遺伝子は、一点一画の誤りなく、寸分の位置も間違えないで、法則のもと、みずから成長していくのです。その栄養素は、お母さんの食事が、血液となって胎児に送られる。胎児は、それを選び分けて、どんどん成長していきます。

顕微鏡で、やっと見えるたった一個の細胞、初めはまったくの細胞です。その細胞がやや固まって、のっぺらなも

のになる。やがて胴体のような状態になり、手が出て、足が出て、頭が出て、目がつく。耳ができる。全身にやわらかい産毛が生える。これが六カ月くらいです。ところが不思議なことに七カ月か八カ月になると毛がすっかり入れかわるのです。あなたは、ここまでの役目ですと、だれかが号令するのでしよう。そこで、せっかく今まで生えた毛が全部脱けて、その後へ新たな毛が出る。それが毛髪です。とにかく頭にだけ毛が生えるのです。そして、これと同じようなことが、指であれ、爪であれ、みんな必要にして十分なだけ形づくられます。

こういう至れり盡くせりの号令をだれが出しているのでしょうか。科学ではわからないので、これを遺伝情報といっています。その遺伝情報にしたがって、細胞が成長していきます、十月十日が経過し、五体そろった子供が生まれるのです。男か女か、最初の受胎の瞬間に決まり、後は自然のコースを行くわけです。そして、遺伝情報は、意識であって、意識は即ち心です。佛教では、これを意識の四大というのです。

本願の報われた世界

曇鸞大師の『浄土論註』には、本願力というのは、弾く人が

ないのに、自然に聞こえてくるところの妙なる琴の音のようなものだと書かれています。遺伝情報またしかりです。だれが出すかわからないが、一点一画の過ちを許さないと

ころの情報です。そこらのことを考えたときに、摩訶不思議におもえます。いい音楽は、われわれの心を喜ばすでしょう。なぜかという、いい音楽は、気持ちがよく、楽しいからです。本願力もそういうものです。私どもをして、念佛を称えさす力のあるもの、いくらいやだといっても、ちゃんと南無阿弥陀仏を称えさす、その力、それが本願力です。

このことが一番よくわかるのは、私自身です。私は、難しい文字をもって、わからないことをいっているようでは、佛教も今日通用しませんよといっていたのです。それが南無阿弥陀仏と称えるようになりました。これこそ本願力のたまものでしょう。これは私にとっては信心であり、悟りのようなものです。そのなかに報土、本願の報われた世界が現われたもうのです。

本願の報われた世界には、地獄・餓鬼・畜生もない。男も、女も、老いた者も、若い者も、まったく一如平等なのです。これは如来のしからしめられたところの世界であります。ですから、その境地を見ますと、単に山あり川あり

ではなく、何とありがたいことよ、そのおかげで、自分の心が、いかに楽しませてもらえるか、と。そびえ立つ山は霊峰をあらわし、それを眺める人びとの心をさわやかにしてくださる。その山からは川が流れる。水は低きに流れて田んぼをうるおしてくれる。そして広い平野が育って、われわれの食糧もそこで育てられる。その根本はどこか。そこに真如の世界、佛の世界を感じざるを得ません。佛の世界からお育てを蒙っているのです。わたしたちが今日ここにあらしめられたのは、一如平等の真如の世界から与えられたのです。これを信ぜざるを得ません。ですから、本願力というのは、宇宙を宇宙たらしめている力であります。

地球物理学の教える地球は、五十億年かそこそこのことあります。また、今から三十七億年前は、単細胞であったものが進化して、今日の人類があらわれたと進化論でいいます。たしかにそうであろうと私もおもいます。しかし永遠から考えると、ただか三十七億年です。五十億といっても、五百億といっても、数えられる世界は有限です。有限というのはいくら数をふやしても、どこまでも有限です。佛の世界は無限です。その無限なる世界をどうして感知することができるか。有限なる世界を場として、無限な

る本体、如なるものがあらわれてくださるのです。それで、有限のなかにながら有限を超えて無限を感知することができるのです。実際に、有限との対応で無限をわれわれは感じているのです。同じことを、佛さまは凡夫と対応して感じ取る。凡夫こそが、もっとも無限なる佛を感じるわけです。これは一般的にいうなら法則なんです。

凡夫とその法の対応が二種深信といわれています。深信は文字どおり深く信ずることです。それに二通りあります。その一つは、自分は無始よりこの方、つまり宇宙ができるもっと前から、今日まで、ずっと迷ってばかりきたのです。いまも迷っている。迷って迷って、まだ迷っていることを深く信ずる。すなわち自分は凡夫だと深く信ずるのです。それを機の深信と教えているのであります。機というのは、信ずることができる人間のことで、私というものは、自分で悟ることのできない凡夫であることを深く信ずる、そういう人が初めて法を深く信ずることができるのであります。法とは、本願を信じ念佛もうせば、おのずから悟りが開ける、あるいはおのずから佛にさせていただくことができるということ、これが法、しかも法則です。法であってそこに則がある。こうすれば必ずこうなるといふ必然性、そ

れが法則なのです。ですから、私どもが、本願を信じ念佛もうすのは、大いなる法則であります。これを親鸞聖人は『一念多念文意』では、自然の法則という言葉を使われており、また『末燈鈔』の自然法爾に、こういう意味のことを書かれています。遺伝情報は、自然の法則です。自然の法則と自然の法則とは、一にして二、二にして一のように、同一ではない。だが、非常に接近しているのです。自然の法則は遺伝情報というような自然科学の法則で、自然の法則は本願力という宗教的なものです。受け難い人身を受けさせてくれたのは、遺伝情報のおかげです。その人身を受けたから、法を聞くと感動します。本願力とは純真な心で受け取れるところの境地、あるいは向こうの法を承っていると、こちらが自然に心が洗われてくる、そういう対応です。私なんか、法を聞けば聞くほど、こちらの穢なさが微に入り細をうがってわかってくるのであります。

それゆえ私たちは、本願を信じ念佛もうせば、おのずから佛の国へ入らせていただくのです。それが凡夫人報ということなのです。本願は、凡夫を相手に特に説かれています。頭のいい人に向かつては本願は説かれていません。頭のいい人には、すぐ直接に四諦八正道を説き、それを修

行せよとおっしゃいます。凡夫は四諦八正道を順次修行したのでは、もう間に合わない、四諦八正道などという難しいことは捨てて、本願を信じ念佛もうす、ただ一声でいいのです。それを信じ得るのは凡夫です。凡夫にして、初めておかげさまで助かりましたという感じが起るのです。

この機の深信は、親鸞聖人のおっしゃるところの、自利と受けとっていいのではないかとおもっています。たとえば曇鸞大師の『浄土論註』を読みますと、まず自分が悟りを開くことです。それが自利です。そして利他、つまり衆生を救う働きが出てくると説いてあります。親鸞聖人の自利とおっしゃるのは、金子大榮先生は自力とおっしゃっていられます。私はそれに参酌させていただいて、自利とは機の深信だとおもうのです。自分は凡夫で絶対に救われない存在であることを深く信ずる、それは自利の完成です。悟りではないが、真実に自分は凡夫であることを自覚させられるのです。さればこそ法の深信がいただける。法の深信をいただけるその前提には、機の深信がなければなりません。機の深信は自利の行持で、そこにおのずから法の深信があらわれたまうのです。こういうことで、凡夫人報がわかると『歎異抄』を読む手引の一つになるのではありませんか。